

## 第 53 回 全国国保地域医療学会

### ランチョンセミナー「離島医療はおもしろい」

隠岐広域連合立隠岐島前病院 院長 白石吉彦

隠岐諸島は島根半島の北約 40-70km に浮かぶ 4 つの有人離島からなる。北東側にある大きな島を島後（どうご）とよび、その約 10km 南西側に西ノ島、中之島、知夫里島があり、島前（どうぜん）と呼ぶ。島前の 3 島にはそれぞれ無床の国保診療所のみで、開業医はなく、全て公立医療機関である。唯一の入院施設として隠岐広域連合立隠岐島前病院（以下当院）がある。当院は一般病床 20 床、療養型 24 床の計 44 床で、島前全体の 6,200 人を対象とし、高齢化率 40%の地域で 1.5 次救急までの受入から在宅医療までを担っている。

平成 10 年に当初 1 年の予定で、それぞれ島前診療所（当時、現当院）と浦郷診療所に夫婦で赴任し、今年で 16 年目になる取り組みを中心に紹介する。当院は大学派遣の外科医、小児科医、自治医大出身の内科医で構成されていた。現在は内科系総合医の複数制という形を取り、近隣の浦郷診療所、知夫診療所を巻き込んだ形での地域医療支援ブロック制をとっている<sup>1)</sup>。内科小児科という名前の内科系よろず外来、外科外来という名前の処置系外来を、常勤総合医 6 名で担っている。平成 22 年に常勤腹部外科医が不在となり、現在は虫垂炎、ヘルニアも島外へ紹介している。ただし救急車は全例受入れ（離島なので当たり前だが）、できることはやり、できないことは紹介する。結果として総合医が内科外来と外科外来を交互に行うという珍しい診療を行っている<sup>2)</sup>。幅広い診療内容の研修を求めて多くの医学生、研修医が島を訪れる。

救急という医療の入り口があり、治療終了という医療の出口がある。コミュニティの小さいこの島では医療が終了した後からが本当の見せ場である。自分たちの行った医療や看護などが患者さんの幸せにつながっているかどうかを確認することができる。退院前退院後に看護師、薬剤師、療法士といったコメディカルも在宅訪問を行い、病院全体としてその後の在宅生活を支え続けている。寄り添う医療看護に関心を持ち看護学生も多数見学を訪れ、さらに平成 25 年には離島研修プログラムを立ち上げ現在も 2 名の研修生（看護師）を受け入れている。

年間 10 数名の研修医の毎月の報告会に病院職員だけでなく、地域住民にも参加してもらい、現在の医療の現状などを話し合いながら、島の未来について語り合っている。後鳥羽上皇、後醍醐天皇の過ごされた悠久の歴史を感じつつ、休みの日には海や山を満喫する楽しい日々を送っている。

### 参考文献

- 1) 白石吉彦. (2011 年 3 月). 「へき地・離島医療を支える」総合医による複数制と総合看護. 雑誌『病院』, 70(3).
- 2) 白石吉彦. (2013). 小規模離島における内科系総合医による外科外来の試みーへき地小病院外科外来の疾患頻度と必要な技能ー. 月刊地域医学, 27(5), 32-39.